

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 10年5月 ～鉱工業生産は減速局面へ

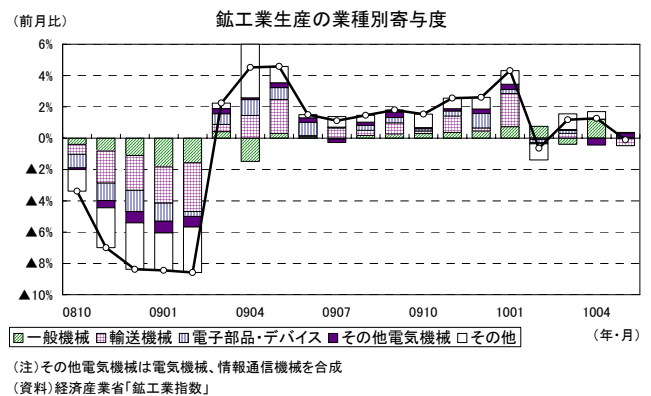
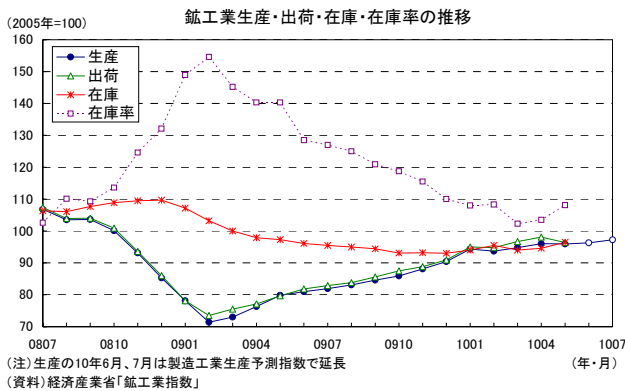
経済調査部門 主任研究員 齋藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

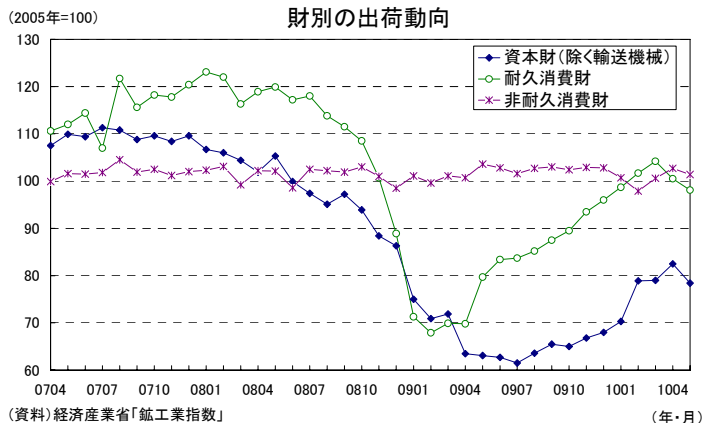
1. 生産指数は3ヵ月ぶりの低下

経済産業省が6月29日に公表した鉱工業指数によると、5月の鉱工業生産指数は前月比▲0.1%と3ヵ月ぶりに低下し、ほぼ事前の市場予想（ロイター集計：前月比0.0%、当社予想も同0.0%）通りの結果となった。出荷指数は前月比▲1.7%と3ヵ月ぶりの低下、在庫指数は前月比2.0%と2ヵ月連続の上昇となった。

5月の生産を業種別に見ると、在庫調整に伴い大幅な減産が続いていた情報通信機械が前月比5.5%と4ヵ月ぶりに上昇するなど、速報段階で公表される16業種中10業種が前月比で上昇（6業種が低下）したが、これまで生産の牽引役となってきた輸送機械が前月比▲2.7%と大幅に低下したことが生産全体の足を引っ張った。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷（除く輸送機械）は前月比▲5.0%となったが、4月に前月比4.4%の高い伸びとなった反動によるもので、4月、5月の平均は1-3月期よりも5.7%高い水準となっている。また、建設投資の一致指標である建設財出荷は1-3月期の前期比3.4%の後、4月が前月比3.1%、5月が同3.5%となり、4月、5月の平均は



1-3月期よりも2.0%高い水準となっている。

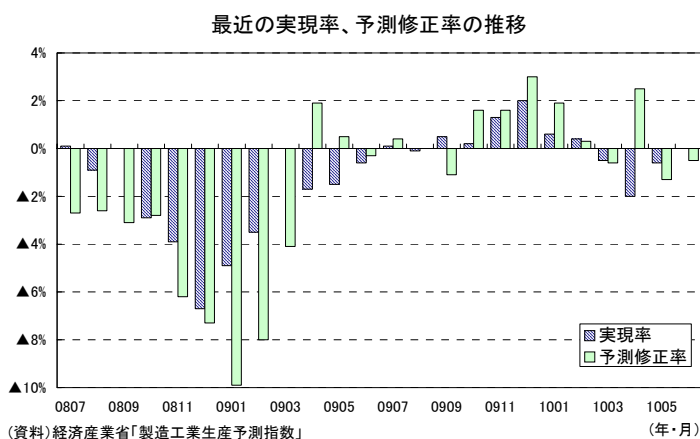
GDP統計の設備投資は09年10-12月期が前期比1.1%、10年1-3月期が同0.6%と2四半期連続で増加したが、4-6月期も回復傾向が続いていると考えられる。

一方、消費財出荷指数は1-3月期の前期比2.4%の後、4月が前月比▲0.6%、5月が同▲1.1%と弱含みの動きとなっている。特に、エコカー減税・補助金、エコポイント制度といった政策効果から好調を続けてきた耐久消費財が4月の前月比▲3.6%に続き、5月も同▲2.4%の大幅低下となった。ここにきて政策効果が一巡しつつあることを反映した動きと言えるだろう。

2. 4-6月期も増産見込みだが、伸び率は大きく低下へ

製造工業生産予測指数は、6月が前月比0.4%、7月が同1.0%となった。生産計画の修正状況を示す実現率（5月）、予測修正率（6月）はそれぞれ▲0.6%、▲0.5%であった。

昨年春以降の生産回復局面では企業の生産計画が上方修正される傾向があったが、このところ下方修正が目立つようになっていく。この点は生産の先行きを見る上で懸念材料のひとつと言える。



予測指数を業種別に見ると、5月に大幅に低下した輸送機械が6月も前月比▲4.3%の大幅減産計画となっている（7月は同1.4%）。輸送機械は09年4-6月期以降、前期比10%前後の高い伸びを続けてきたが、10年4-6月期は5四半期ぶりに前期比で低下することが見込まれる。

一方、一般機械は設備投資の持ち直しを反映し、回復の動きを強めている。5月の速報値は4月が前月比11.7%と急伸したこともあり、前月比0.2%とほぼ横ばいにとどまったが、予測指数は6月が前月比7.2%、7月が同4.3%の高い伸びとなっている。4-6月期は前期比で二桁の伸びとなることが確実で、生産の牽引役は輸送機械から一般機械に移ったとみてよいだろう。

5月の生産指数を6月の予測指数で先延ばしすると、4-6月期の生産指数は前期比1.9%の上昇となる。5四半期連続の増産は確保できそうだが、1-3月期の前期比7.0%からは伸びが大きく低下することが確実となった。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。